

犬を飼うということ

2012年8月14日

犬と歩けば棒にあたる 佐藤 達也

「犬を飼うということ」目次

◆犬との共生

【犬を飼う目的】

【犬の立場の移り変わり】

◆犬との暮らしの現実

【可愛い、楽しいだけではない生活】

【犬は吠える、唸る、咬むのが当たり前の生き物】

【将来的なことも考える】

【命の尊さを考える】

◆犬からの恩恵

【勇気とやすらぎ】

◆どっちを選べば良いの？

【純粋種○r雑種】

【子犬○r成犬】

【オス犬○rメス犬】

【室内飼い○r外飼い】

【室内トイレ○r屋外トイレ】

【ブリーダー○rペットショップ○r譲渡会】

【体のワクチン○r心のワクチン】

【去勢手術と避妊手術について考える】

【去勢・避妊手術に対する誤解】

【交配～出産について考える】

◆犬との共生

【犬を飼う目的】

30年前・・・外飼いの犬が圧倒的に多く、番犬として飼われる犬も多かった。室内で犬を飼うのは富裕層が多く、一般には犬を室内で飼うという選択肢はない時代でした。

20年前・・・小型犬（室内犬）は愛玩犬、中・大型犬（外飼い）は番犬の役割も。大型犬ブームの到来。外来の洋犬種が増え始め、シベリアン・ハスキー、ゴールデン・レトリバー、ラブラドル・レトリバーなどが人気となった。しかし、シベリアン・ハスキーはあまり吠えないことと、訓練性能が低いことが災いして、「番犬にならない。」「頭が悪い。」「引っ張りが強い。」などの批判を飼い主から受け、ついにはマスコミまで「バカ犬」呼ばわりである。

ゴールデン・レトリバーは人にもとてもフレンドリー。その為、泥棒が入っても番犬にならないなどの問題が一部で浮上。

ラブラドル・レトリバーに至っては、盲導犬の賢いイメージで飼い始める者が後を絶ちませんでした。しかし現実にはハイパワーなヤンチャ犬。訓練性能の高さは折り紙付だが、一般飼い主には持て余すという有様。そして人にもフレンドリーな為、やはり番犬としての働きは期待できないことが問題視されたりもしました。

以上のように、昔は犬に番犬としての働きまでも求めるところがありました。そもそもシベリアン・ハスキーは作業犬で、ソリ引きのエキスパートです。その分野では警察犬として訓練能力の高いシェパードですら足元に及びません。ゴールデン・レトリバー、ラブラドル・レトリバーは、撃ち落とした鳥を回収するガンドッグであり、運動量も豊富である。そして人に従順な気質になるように作出された犬種なのです。これらの犬種特性を無視して、「番犬にならない。」「バカ犬」などと評価を下すのは間違いなのです。

現在（ここ10年）・・・小型犬ブームの到来。小・中・大型の多くが愛玩目的の飼育となり、従来外飼いされていた犬種も室内飼いへ移行。純粹に愛玩目的での飼育が増えて、番犬としての働きを求める者も少なくなりました。むしろ吠える犬は苦情の元になるので敬遠されるようになる一方、小型犬は吠え過ぎる個体も多く、実は番犬としての働きは折り紙付きという皮肉な話もあります。

【犬の立場の移り変わり】

20年前、飼育目的はそれまでの番犬メインから愛玩犬へと移り変わり、犬は人間の仲間として「コンパニオンアニマル」と表現されるようになりました。そして室内飼育が増えるのと同時に、犬たちはより我々の生活に密着し、「家族」としての地位を揺るぎないものにしてきました。形はどうあれ人間と犬は大昔から共生をしてきた訳ですが、今ではその様式も、「犬を飼う」から「犬と共に暮らす」というものに人々の意識も変わってきています。

但し、共に暮らすとは言うものの、対外的には犬の管理者として「飼い主」という立場は不変であり、そこには飼い主としての社会的責任が暮らしの中では付いて回ります。

◆犬との暮らしの現実

【可愛い、楽しいだけではない生活】

一般的に犬を飼う目的は、多くの場合、理屈抜きでその可愛らしさにあると思います。犬は飼い主によく懐き、家に居ても一緒に出掛けても、癒されて楽しいドッグライフを過ごす日々をイメージされる方がほとんどかと思います。そして、「犬は吠えない、唸らない、咬まない、散歩も楽。」そんなことを思う人が後を絶ちません。これは正しい情報を発信すべきペット業界の怠慢によるところもありますが、動物を迎える飼い主側も正しい情報を積極的に取りに行くべく勉強するべきところでもあります。

【犬は吠える、唸る、咬むのが当たり前の生き物】

実際に犬との暮らしを始めると、様々な問題が浮き彫りになってきます。特に人の生活に密着する室内飼いほど、人の生活習慣と犬の習性が噛み合わずに問題と化すものです。まず子犬を迎えて直面するのが、トイレの教育。続いて子犬が手足にジャレて噛み付く行為に飼い主は手を焼きます。更には室内にある家具や雑貨、衣類などを手当たり次第に噛んで破壊するイタズラ行為が続きます。

これらは犬としてごく普通の行動なので、そうした習性に適した環境の用意と対処をすれば全く問題にはならないものです。しかしそのような準備がない飼い主は、世話というより事後処理に追われる日々。最近では、「子犬の育児ノイローゼ」になる主婦の方々もいる始末です。好きで飼い始めた犬なのに、ノイローゼになるのは只事ではありません。これは動物を飼うことを甘く見過ぎた結果に過ぎませんが、それでも犬は待った無

しに成長を続けます。楽しいはずの犬との暮らしが、辛い暮らしになってしまう事例です。

【将来的なことも考える】

犬の寿命は10～15年にも及びます。日常の散歩や世話だけでも365日休まず行わなければならない、そんな日々が向こう10年以上に渡って続きます。命を育むからには自己都合を優先してばかりもいられません。犬の世話の為には遊びや食事の誘いも断らなければならないこともありますし、様々な用事を切り上げなければならないこともあります。

また、飼い主も犬も健康で平和な日々が続く訳ではありません。年間を通していても、飼い主が病気や怪我に見舞われたり、犬が病気や怪我に見舞われることもあります。そんな時、誰が犬の世話をするのか？ または仕事の都合で宿泊出張するとき、誰か世話をするのか？ 家族旅行をする場合はどうするのか？ こんな時はペットシッターに依頼をしたり、ペットホテルに預けるのも選択の1つですが、犬と泊まれる旅行先を探して、一緒に旅を楽しむことも選択の1つです。

そして、転勤などの理由で引っ越しを迫られたとき、犬と一緒に連れて行くだけの気持ちはあるのか？ 場合によっては仕事よりも犬を選ぶ覚悟はあるのか？ または致し方なく手放すしかないとき、新たな飼い主を探すだけの労力を掛ける根性はあるのか？

正直なところ自分の人生の10年先など誰にも分からない訳で、犬の将来の保証など誰にも出来ないと思います。そして、そんなことをいちいち考えていたら、犬を飼うことに気持ちが揺らぐかも知れません。でも、先々考えられる問題の数々を思い浮かべることが絶対不可欠で、難局に見舞われても犬を飼い続けてみせるという心構えがあるかどうかは先に問われるところでもあります。この心構えとは、「問題があっても何とかなるだろう。」といった楽観的なものではなく、「問題に直面しても何とかする！ 犬の生涯に責任を持って世話をする！」という強い意志、すなわち終生飼養への思いを意味します。

【命の尊さを考える】

もしも一連の話を聞いて犬を飼うことを躊躇う方がいるとすれば、それもまた命の尊さを重んずる素晴らしい判断であります。犬を飼えば必ず諸問題に直面するものです。10～15年の毎日を犬と過ごすことに喜びを見出し、責任を持って犬の生涯を全うさせ

る強い意志、またはその覚悟を持てる者だけが犬を飼いつけることが出来ると思います。そして犬と暮らす際には、自分たちの生活の質と併せて犬の生活の質をも思いやり、人も犬も互いに幸せな暮らしを実現することが大切です。

ちなみにペットショップの多くやブリーダーの一部は、子犬を売りたいが為に綺麗事しか言いません。一応、大変な部分も話してはくれますが、そこに現実の厳しさと真剣さがまるで感じられない話し振りが多く、「犬は勢いで買うものだ。」とでも言ってるようにさえ聞こえます。保護したなどの切っ掛けで犬を飼いつめることになる場合もありますが、唐突であれ準備万端であれ、犬を飼いつめるということは巡り合せなのです。その巡り合せがあったとき、勢いや衝動だけで安易に決めてはいけません。

◆犬からの恩恵

【勇気とやすらぎ】

犬を飼つこと、犬と暮らすことの喜びは、まさに日々の世話を رفتたり、共に時間を過ごしたり、共に行動することにあります。マスコットとして傍に置くだけで満足ならば、日々の散歩も餌やりも健康管理も不要なロボット犬「AIBO」や「縫いぐるみ」で十分でしょう。しかし本物の犬との暮らしを求める者は、そんなモノが欲しい訳ではありません。

犬と一緒に過ごしていると、様々な恩恵を受けることに気が付きます。まずはその可愛らしさには理屈抜きに癒されます。日々の散歩においては生活が規則正しくなり、仕事からの帰宅も早くなります。併せて散歩の効能として自らの健康維持にも一役買います。

交通機関が発達した現代において、大人になると自分の町すら歩かなくなるものです。しかし毎日犬と散歩をすることで足元の植物などが目に留まり、四季の空気と情景を肌で感じ取れるようになり、人間が忘れ掛けている本来の感覚を呼び起こしてくれるのです。

また、町を歩けば疎遠だった人々との交流が持てたり、犬がいることで人間だけでは絶対に行くことがないであろう場所に出向くようになつたりして、見聞や体験の幅も広がります。つまり、犬と歩けば棒にあたり、様々な一期一会に巡り合える楽しみがあるのです。そして犬は生きることに常に前向きかつ平和的で、その姿を見ていると勇気と安らぎを与えられます。以上は私が今まで犬から受けきた恩恵の数々であります。

◆どっちを選べば良いの？

【純粋種 or 雑種】

純粋種の良いところは、成犬になったときの体格や容姿はもちろん、気質や性格の傾向、犬種ならではの病気や問題点などを事前に把握できるところにあります。その為、自分の生活スタイルや住宅環境に合った犬を選べるのが最大のメリットです。

雑種の場合、子犬で迎えると成長時にどのような体格や容姿になるかが未知数です。しかし、未知なところが楽しみでもあり、容姿に関して言うならば、そのオリジナリティが好まれるところでもあります。ちなみに成長時の体格・容姿の予測としては、親犬を見ることが望ましいです。

健康面では、純血種の場合は血筋がそれぞれの犬種で固定化されることで、遺伝的な疾患の傾向が見られる場合があります。逆にその予測も付くので、事前に予防策を講じることも可能です。対する雑種犬は血筋に偏りがないので、健康で丈夫な個体が多いものです。気質の面でも純粋種と比べて偏りがなく、人間に対してフレンドリーな個体が多く、あらゆる面で可もなく不可もなく、平均的でバランスが良いと言えます。

【子犬 or 成犬】

子犬から育てるメリットは、飼い主好みの色に染めていけることです。飼い主をはじめ、家族にもよく懐かせることが出来ますし、自宅や周囲を含む生活環境およびライフスタイルに馴染ませていくことが容易にできます。但し、それは生後2~3カ月から1歳に至るまで、どれだけ社会化に時間と手間を費やすかに掛かっています。ちなみに、子犬の育成において躰は二の次で、「一に社会化、二に社会化。」です。

一方、成犬を迎えるメリットは、子犬ほど手間が掛からないということです。但し、それは社会化がなされた個体や、人懐っこい個体に限ります。逆に、精神面が出来上がっていない場合、その修復には子犬以上の時間と手間を必要とします。特にそれらの作業は初心者飼い主には重過ぎる負担となるので、成犬を迎える場合は社会化がなされていて、更に基本的なしつけもなされている個体であることが望ましいです。

また、よく飼い馴染らされた成犬は世話も楽なので、苦労も少ないです。その判断基準として、人や他犬、車や物音に物怖じすることがないかと、犬の体中どこを触っても平気であるかなどの確認は必要です。もしも、ある特定場面で噛み付きの要素がある場合、その個体は見送るのが賢明でしょう。

【オス犬 or メス犬】

犬も性別による気質の違いがあります。オスは基本的に我が強く、1～2歳の若い個体はやんちゃ盛りで、時に他犬に対して挑戦的な自己顕示を行うこともあり、他犬とのトラブルを見せるのはオスのほうが多いです。遊びにしてもイタズラにしてもハイパーなオスですが、3歳になる頃には次第に落ち着いてきます。一方、メスは基本的に気質が穏やかで平和的。オス同様に若いうちはやんちゃもしますが、他犬とのトラブルは少ないです。なお、同じ犬種で比較する場合、オスのほうがメスよりも体格もパワーも上回りますので、単純な飼い易さとしては初心者にはメスのほうがお勧めです。しかし、簡単には手に負えない感じがオスの面白いところなので、犬との生活に刺激も求めたい方にはオスとの暮らしは楽しいものになるかと思えます。

マーキング行動（匂い付け行動）についてはオスもメスも行いますが、一般的にオスのほうが行動半径も広く、その仕事ぶりは熱心で、片脚を上げてあちらこちらと高い位置にマーキングしようとするので、都会暮らしの場合はトイレの場所に制限を受けやすいです。メスの中にも自己顕示が強い個体は片脚を上げてのマーキングを行うこともあります。多くは腰を屈めて行います。

室内トイレを検討される場合、オスよりもメスのほうが覚えやすい傾向にありますが、これは子犬の時からトイレ習慣化も影響されます。但し、子犬のうちには室内トイレを利用していても、成長に伴い外トイレを好むようになる個体もいます。これは日本犬のような野性味のある犬に多く見られるのですが、巢（屋内）を汚したくないという野性的な本能が影響することと、特にオスに関してはテリトリー（散歩エリア）におけるマーキング行動の為に尿を溜めておくという理由も考えられます。しかし、それは犬として健全なことであり行動としては何の問題もありません。

春と秋の年2回の発情シーズンにおいて、一般に気持ちの落ち着きがなくなるのはオスです。これはメスの発情に伴うフェロモンの影響が大きく、発情中のメスの匂いに対して反応してしまうというものです。但し、全てのオスが興奮するかのように落ち着きがなくなる訳ではありません。一方、メスの場合、発情期には出血が2週間ほど続くので、室内飼育の場合は部屋が汚れることも覚悟しておく必要があります。そして、特にメスを外飼いする場合は発情期だけは要注意です。発情メスに釣られたオスが寄ってきた場合、メスは基本的に拒否するものですが、排卵準備が整うと発情メスはオスを許容するようになります。そのタイミングで野良犬や放し飼いの犬がやってきた場合、簡単に交尾を行ってしまう恐れがあるのです。ちなみサークルやフェンス越しでも上手に交尾を行うケースもあるので、メスの外飼いは要注意なのです。気質の上ではメスが飼い易いとは述べましたが、管理の面ではオスもメスもそれぞれに気遣うべきところがあります。オスもメスもそれぞれに魅力はありますが、一言でいうならば、オスは動物的

要素が強いところが魅力であり、メスは温厚なところが魅力であると思います。

【室内飼い or 外飼い】

室内飼いのメリットは、飼い主の生活により密着できることで、コミュニケーションを取り易くなることです。すると犬もより感情豊かになり、互いの理解力も深まります。但し、その一方で飼い主が犬をかまい過ぎることで犬がストレスを抱えて、関係が悪化することもあります。犬の気分も尊重して、過干渉にならないように注意が必要です。

外飼いのメリットは、初めから犬専用エリアを設ける形になるので世話が楽なことと、犬と適度な距離を保てることで、過干渉による問題が生じることがないことです。その為、犬が犬らしく育ちます。しかし外飼いの場合、夜間は犬の警戒レベルが自然と上がるため、犬は熟睡はしません。それも習性ではあるのですが、夜間だけでも屋内（玄関等）に入れてあげると、周りを壁で守られていることと、家族の存在を近くに感じることで安眠します。そして外飼いの場合、逆に夜間よりも警戒レベルの低い日中に安眠します。

【室内トイレ or 屋外トイレ】

室内飼いの場合、室内トイレを覚えさせたほうが天候に関わらずに排泄を出来ることがメリットです。また、飼い主が体調不良であったり、帰宅が遅くなる時でも、とりあえずトイレの心配だけはありません。また、将来的に犬が老化して、外をあまり出歩かなくなったときでも室内で排泄が出来ることは強みです。そして、トイレシートが日々不可欠になるので、月々の経費としてエサ代と併せて計算に入れておく必要があります。

一方、室内飼いをしても、排泄は外でしたがる個体もあります。これは家を巣とみなして汚すのを嫌う為ですが、そうした犬らしい習性は日本犬ほど持ち合わせています。子犬のうちには室内で排泄していても、成長と共に室内では我慢をするようになり、外に出るまではしない個体が多いです。雨でも台風でも排泄を外で済ませなければなりません。動物であれば巣から出ない日などないので、それは365日の日課として当然と言えます。また軒先や庭がある家では、まずはそこを第一のトイレとして覚えさせることで、将来的な排泄の問題を緩和できます。

【ブリーダーor ペットショップ or 譲渡会】

ブリーダー（繁殖家）から犬を迎えるメリットは、子犬期を母親や兄弟と過ごすことで、犬としての社会学習がなされていることにあります。犬社会の学習がなされた子犬は、他犬に臆することもなく、人とジャレて遊ぶ際にも噛み加減がすでにコントロールされています。子犬期に親兄弟と過ごすことは犬として本来あるべき健全な環境なので、精神面でも健康面でも良い子犬に巡り合える可能性が高いです。但し、ブリーダーの中には子犬を親と引き離して育てるケースもあるので、そこはブリーダーに育成方法を尋ねてみる必要があります。ブリーダーの場合、親犬を含む見学をさせてもらうことは必須条件で、見学拒否または子犬には会わせてくれても親犬には会わせてくれない場合は要注意。特に育成に関わる母犬の安定ぶりが子犬の成長時の目安になるので、母犬を見ることが出来ないのであればブリーダーで犬を求める価値は下がります。

一方、繁殖をしている人間が全てブリーダー（繁殖家）と呼べる訳ではなく、単なる繁殖屋もかなり存在します。ブリーダーは特定犬種に入れ込む専門家なので、犬種を1～2種に絞るのが一般的です。対する繁殖屋は何種類も抱え、子犬も多く抱えます。まさに質より量の商売なので、犬社会の学習も何もあったものではありません。見学はOKなところが多く、所狭しと子犬がケージやサークルで管理されています。こういう所は「繁殖家」ではなく「繁殖屋」なので、たとえ母犬に会わせてくれたとしてもお勧めは出来ません。

そしてブリーダーから犬を迎える場合のもう一つのメリットは、犬種に精通していることで、専門知識が豊富であること。どのブリーダーから子犬を選ぶかに関しては、最終的にはブリーダーの人柄を見て判断するのが良いです。実際に素人が子犬を見たところで、どのように育つかの良し悪しは分かるものではありません。しかし確実に言えるのは、母犬をはじめ、犬の育成方針はブリーダーの人柄に左右されるということです。ですから、人柄を含めて信頼に値するブリーダーを選べば失敗はしないでしょう。そしてブリーダー巡りをする際は、子犬の譲渡（購入）に関する返事を即答してはいけません。また即答を求めるような商売っ気が強いところも注意しましょう。

ペットショップに関しては、一般の方が子犬と接点を持つ為の代表的な窓口となる為、気軽に子犬を見に行けることがメリットです。但しペットショップの子犬というのは、繁殖屋の元で早々に親兄弟から引き離されて「犬の市場」に出荷され、そのままペットショップに競り落とされる為、犬社会の学習が完了していないことが大きな問題です。ペットショップでは狭い空間に閉じ込められ、精神的にはかなり不健康な状態と言えます。見た目こそ可愛い子犬ではありますが、家に迎えてから経験学習させねばならない課題が山積みの為、育成にかなり苦勞する可能性大です。また最近のペットショップで

は、経験の浅い若いスタッフも多く、子犬が成犬になった際の犬種特性やら、育成の注意点などの専門知識が希薄な店舗も多く目に付きます。ペットショップの中でも生体展示販売をしているところは、犬はあくまでも「商品」なので、子犬を売り切る為の説明が主体となり、犬を飼うことにおけるデメリットなどをハッキリとは提言してくれないので気を付けましょう。

譲渡会（里親交換会）については、雑種犬が中心となります。地域の動物愛護センターや動物ボランティア団体が主催する譲渡会が一般的です。動物愛護センターでの譲渡会は子犬が中心。ボランティアの譲渡会では子犬から成犬まで様々ですが、これらの譲渡会に出る犬の多くは、飼い主に遺棄されて一度は命を落としかけた犬たちです。または飼い主が犬を飼いきることが出来なくなった時、新たな飼い主を探す責任を果たすべく譲渡会に参加されている場合もあります。ここに集まる子犬の場合、親兄弟または兄弟同士で過ごしている個体も多いので、ペットショップよりも犬社会の学習が成されているなどのメリットがあります。特に愛護センターで譲渡会に出す子犬は健康管理も行き届いており、優良な子犬としてお勧めです。

【体のワクチン or 心のワクチン】

子犬を生後2ヵ月過ぎに迎えると、獣医さんはワクチン接種が完了するまで（生後3～4ヶ月）は子犬を自宅外に連れ出してはいけないと言います。それは予防的観点からなのですが、同時にその時期は、社会化を行う大事な時期となります。ワクチン接種は病気に対する免疫力を肉体的に高める行為ですが、社会化はこれから生きてゆく世界に対して、精神的な免疫力を付ける行為です。病気の予防という意味では、ワクチン接種が完了するまでは、不特定多数の犬たちが集まる公園や広場、河原の土手などの一般的な犬の散歩コースを避ければ問題ありません。そして生後2～3ヶ月の子犬は新しい物事を1番受け入れやすい時期なので、この時期にこそ新しい世界に積極的に馴染んでいく必要があります。その第一は、近所を歩かせることと、人々に触れ合わせることです。車に馴染むのもこの時期からのほうが良いです。社会化適期を逃してしまうと、あらゆる社会化の作業が手間の掛かるものとなります。何よりも精神的免疫が出来ていないことで、日常的問題を引き起こすようになります。他人や他犬を恐れたり、車や自転車に吠えたり、あらゆる物事に対して臆病になってしまうのもその一つです。犬が人間社会で生きていく為には、人社会における社会化は必須であり、伝染病の予防と同様に重要なのです。しかし、多くの獣医は社会化の重要性を認識していないことと、獣医の立場上からワクチン接種のプログラムを優先して、子犬の外出禁止令を唱えます。それを鵜呑みにしていると、社会に対する精神的な免疫は確実かつ大幅に遅れを取るようになることを忘れてはなりません。

【去勢手術と避妊手術について考える】

一般的にオス犬の精巣摘出を「去勢手術」といい、メス犬の卵巣および子宮の摘出を「避妊手術」といいます。去勢手術の主な目的とメリットは、メス犬との望まぬ交配によって子犬を産ませないことや、前立腺肥大・肛門周囲腺腫などのオスならではの病気の予防が挙げられます。または子犬の睾丸が腹腔内に留まり適切に降りてこない「陰睾丸」の場合、生殖能力がないことと、病気予防の観点から去勢を行います。ちなみに片側のみ陰睾丸の場合は生殖能力は持ち合わせていますが、遺伝形質の問題上、繁殖に用いることは出来ません。その他、生涯に渡り繁殖するつもりのない家庭犬の場合、満たされることのない発情期の性欲を断つ目的で去勢することもあるれば、オスの気性の荒っぽさを無くすことを目的とする場合もあります。去勢をすることでオスの性ホルモン分泌がなくなるので気質が中性化されるような感じとなり、気質の穏やかさはそれなりに得られる傾向にありますが、行動と経験の積み重ねによって形成された性格を根本から変えることは不可能です。

次に避妊の目的とメリットは、望まぬ子犬を産ませないことと、乳腺腫瘍・卵巣腫瘍・子宮蓄膿症など、メスならではの病気の予防が挙げられます。ちなみに「望まぬ子犬」の意味についてですが、現代の日本において、年間約20万頭の犬猫がセンター（行政施設）にて致し方なく殺処分されています。その大半は、自らの犬を飼育放棄する無責任な飼い主がセンターに連れ込むケースと、望まぬ子犬が産まれたことで飼いきれない犬が増えたり、貰い手探しをするも見つからないという理由で飼い主が無責任にもセンターに連れ込んだり、または飼い主が無責任に子犬たちを捨てたりすることで、地域で通報～捕獲されてセンターに行き着くというケースです。飼い主が気付かぬところで、望まぬ性行為に及んでしまうのが犬という生き物であり、その結果、多くの犬たちが殺処分に至っているという現実があり、日本の社会問題にもなっています。もちろんそれらの犬猫殺処分に使われる費用は国民の税金であることも認識しておく必要があります。

倫理的には、犬たちに交配をさせてあげることは至って健全な発想ではありますが、飼い主たる者、この世に生まれる子犬の命に責任を持てるかどうかを真剣に考えなければなりません。それはメス犬の飼い主だけでなく、子犬を産まないオス犬の飼い主にも言えることであります。特に郊外や田舎の一部の飼い主は、犬の行動欲求を満たすべく放し飼いにしたり、早朝や夜間に野放しにして自由散歩をさせる行為が日常化していますが、日本では放し飼いやリードなしでの散歩は禁止行為とされています。交通事故の問題や、犬が苦手な人とのトラブル他、問題が多々あるからです。その一方で、田舎や山奥ではトラブルの起きない範囲での放し飼いは、日本の古き良き文化と言えること

るもあります。しかし、その放し飼いがオス犬であれメス犬であれ、発情期に至っては何処かの庭に居る犬と性行為に及んでしまうことがあります。メス犬の飼い主は妊娠することでその事実に気付きますが、オス犬の飼い主は自分の犬が知らぬところで父親になっているかも知れないということを肝に銘じなければいけません。社会問題にまで発展している望まぬ子犬の誕生を防ぐ上でも、決して放し飼いはするべきではありませんし、自分の犬を色々な意味で守る為にも去勢・避妊の手術は一般普及しています。これがどれ程の社会問題化かというと、自治体によっては手術費用の助成金を出してくれるところもある程なので、犬の交配に至っては、飼い主は子犬の命に対する倫理的責任と社会的責任を真剣に考えなければなりません。

通常、以上のことを踏まえて1歳未満かつ最初の発情期が来るまでに手術を行うのですが、少なからず一般家庭犬の生涯において子犬を産ませるかどうかの判断は、犬を迎え入れる前から考えておくべきことであり、手術についてはそれも踏まえて総合的に判断することが望ましいでしょう。なお、去勢・避妊手術によるデメリットですが、性ホルモンの分泌がなくなることで活動量や基礎代謝率が下がり、太りやすくなるとされます。その為、手術前と同じ餌の分量を与えていると知らぬ間に肥満体になることもあります。手術をしようとしまいと犬の体重・体型・食欲・運動量の変化を見ながら餌の量をコントロールするのが正しい与え方なので、その点に注意すれば肥満の心配はありません。

【去勢・避妊手術に対する誤解】

1歳を超えたオス成犬が去勢を行う理由の中に、次のようなものがあります。「人や他犬に対する攻撃性が強く、咬み付きの問題を抱えている。」これらの状況においてドッグトレーナーなどに相談すると「去勢をしましょう。」などの安易な言葉が返ってくる場合があります。これらの問題は性ホルモンが直接の原因ではなく、成犬になるまでの犬の育て方や経験内容、環境に起因するものなので、あの手この手を尽くして犬への接し方および環境の改善に努めるのが第一となります。そして、それらの外的要因の消去に努めてもなかなか改善が見られず、消去法で最終的に残った原因要素がオスの性ホルモンであると思われる場合にのみ去勢は有効となります。つまり外的要因への働きかけを行うことなく去勢をしたところで、その手術は的外れとなります。但し、去勢をすることによって純粋な繁殖本能は失われるので、発情期のメス犬を巡る他のオスとの闘争を起こすリスクが軽減されると言えます。もっともきちんと管理された状態の飼い犬であれば、メスを巡る他犬との闘争など日常では有り得ないものです。

次に「発情メスに対する興奮度が高い」「メスに対するマウンティングがしつこい」な

どの問題において去勢を検討されるケースもありますが、ここで気を付けたいのは、そのオス犬が繁殖で交配を行ったことがあるのかどうかと、1歳に至るまでの間、周辺に発情メス犬が多い環境で育ってきたかどうかということ。性行為や発情メスの匂いを知って育ったオスは、その刺激が脳に記憶されるとされます。この場合、去勢を行うことで性ホルモンの分泌を断ったところで、匂いの刺激に対する脳の反応ばかりは抑制出来ず、マウンティング行為は改善されない可能性も高いです。逆にそのような発情刺激を受けずに育った犬の場合、成犬になってもその刺激に固執しない傾向にあるとも言われています。

「マーキング行動」について。これは本能であり行動の習慣化なので、去勢・避妊を行ったところで排尿時に片脚を上げる行為が無くなることもなければ、マーキング行為が減少する訳でもありません。習慣化させないようにするにしても、去勢・避妊手術を行える月齢に達する頃には、犬がマーキング行動を覚えてしまっていることが多いです。先に述べたようにマーキングは本能であり行動の習慣化なので、させないようにするのではなく、上手にさせる方向に導くことがポイントです。その方法は簡単で、散歩時にはマーキングしても良いところと不味いところの分別を飼い主が付けて、マーキングさせたくない場所やエリアでは排尿させずにスルーさせます。これが習慣化というものなので、マーキング行動は去勢で解決すべき問題ではありません。

【交配～出産について考える】

メス犬の飼い主の場合、「1度は子犬を産ませてあげたい」「避妊手術は1度産ませたその後に」という声が聞かれることが多々あります。繁殖のプロではない一般家庭において子犬を産ませることは飼い主の欲望に過ぎないのですが、倫理観を盾にして出産をさせたがる飼い主も後を絶ちません。これはいわゆる素人繁殖というもので、犬種の系統（血統）や遺伝形質を無視した無責任な繁殖となります。子犬を産ませるからには引き取り手を確保する必要があり、子犬を世に送り出すからには心身ともに健康な犬を提供する義務が繁殖者には求められます。それは子犬の明るい未来の為であり、新しく犬を迎える飼い主に対する配慮でもあります。全ての子犬の生涯を自分で面倒を見るなら良いとして、イタズラに繁殖に手を出すべきではありません。それはオス犬でも同じで、犬種の存続として子孫を残すことに問題のない気質や形質なのかを考える必要があります。

また、1度でいいから性欲を満たしてあげたいと思うのなら大きな間違いで、1度交配を覚えたオス犬は性行為が刺激として脳に記憶されるので、後の性欲は増大する可能性が高くなります。それゆえに、飼い主の思いや都合だけを考えて交配や避妊・去勢

をすべきではないのです。また、自分の性と照らし合わせて、男性飼い主はオス犬の去勢に難色を示し、女性飼い主の場合は避妊に難色を示す場合がありますが、最終的に手術と名の付く行為を犬に施すかどうかは、病気や怪我の場合も含めて葛藤をするのが飼い主の立場というものであり、責任であります。そのような選択に迫られたとき、その手術の実施または未実施によって犬の生活の質がどのように向上して、どのようなリスクが伴うのかということを第一に考えて頂ければ、その判断はきっと間違いのないものになるでしょう。

以上